平成27年度　学校自己評価表(最終)

中長期目標（学校ビジョン）	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。

今年度の重点目標	1　主体的学習者の育成 2　進路指導の充実 3　積極的な活動の創成 4　広報連携力の発展と国際理解教育の充実 5　定時制教育の充実

年度当初					中間評価結果(10月)			最終評価結果(3月)		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期へ向けての改善方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
1．主体的学習者の育成(企画推進)	文武両道と規律ある生活による自立の促進	・生徒自身の学びが内発的となり、日々の学習が緊張感と落ち着きの中で進められている。 ・学校生活が品位ある言動に満ち、生徒は環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・生徒全員が部活動に加入し、部活動が学習との両立の中で、「心技体」を鍛える主体的、積極的な活動となっている。 ・教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性、同僚性のある指導が出来る。	・多くの生徒が落ち着いた態度で学習に取り組んでいるが、指示がないと学習に取り組めない、受け身的学習になっている生徒が多い。 ・校内では、挨拶など礼儀正しく節度ある行動を取れる生徒が多いが、公共の場でのマナーに幼さの残る生徒がいる。 ・部活動への加入率は96．2%と高く、活動内容や部室の使用状況も改善されてきたが、学習との両立ができていない生徒がいる。 ・分掌にとらわれず、協働の精神を実践しようとする教職員が増えてきた。	・教科を越えた連絡会を持ち、各教科における生徒の内発性を導き出す工夫やノウハウを共有する。 ・利己的な言動の見られる生徒に対しては、毅然とした態度で指導し、保護者と協力しながら集団の一員としての立場を意識させ、自分の言動が周囲に与える影響を深く考えさせる。 ・部活動の時間を保障することに心掛け、開始・終了時刻を守るけじめある部活動を目指す。また、学習不振者に対しては部活顧問、担任、教科担任が互いに連携して指導に当る。 ・学年会・分掌部会・教科会・主任会が報告だけでなく、課題を共有し、様々な立場から意見を出し合い、問題解決、改善の場となるように努める。	・「アクティブラーニング」型授業は、全教科において定着してきたが、授業アンケート結果を見ると、生徒の自主的取組につながっていない。 ・担任の粘り強い指導により、遅刻する生徒も減ってきている。特に3年生では「遅刻0の日」が55日／76日（7月まで）と成果が現れている。 ・提出物の徹底などの指導を通して多くの生徒に改善の兆しが見られるが、主体的な家庭学習ができていない生徒も依然として一部見られる。 ・考査前、考査後の追指導は、顧問の了解の下、各教科で指導が出来た。 ・「率先垂範」に関する教職員アンケート（良い：4，まあまあ良い：3，あまり良くない：2，悪い：1）では、全体の結果は3．0であったが、「分掌外でも早急な対策のための助言や提案をしている」の項目は2．8と低かった。 ・各学年・分掌・教科主任による主任会では、学校で何が問題で何をやるべきかそれを指摘し合える会として効果的に機能していない部分がある。	C	・生徒の自発性を喚起する「アクティブラーニング」型授業にするには、授業の質を高めるしかない。各種研修や先進校視察で学んで来たことを教職員全体で共有し、各教科で研究協議を深める。 ・担任や教科担当の指導を継続するとともに、保護者や部顧問とも協力し多角的な指導を行う。 ・部顧問は、競技力だけでなく下校指導と家庭学習の定着・充実に向けての指導を続けて行う。 ・今後は、主役である生徒のためにどんな教職員集団であるべきかを念頭に問題点を明確にして、学年・分掌の枠を超えて広い視野で取組む姿勢を主任から全教職員に示し広げる。 ・検討した具体策が効果を上げているか検証が必要である。	・後期のアンケートでは「予・復習を進んで行っている」が前期から8%、「発展した内容を自発的に学習している」が10%増加し、学年と教科の連携した取組みによって生徒の内発性が向上しつつある。 ・担任団の継続した指導により、各学年の「遅刻0の日」が1年144日／178日、2年102日／178日、3年104日／167日と成果が現れている。生徒は時間を厳守することで集団の一員としての意識を持って生活できるようになってきた。 ・提出物の徹底できない生徒が固定しつつあったが、特に2学年では部活動顧問との連携と粘り強い指導の結果、その数が減少した。 ・担任と教科、学年部の教職員の間で問題が共有できず、対策が遅れることがあった。教科や学年担任間のシステムとしての閉塞感があることは否めない。 ・学年と教科が連携して効果的な指導がとれている教科もあった。 ・主任会等の会議が、生徒の諸問題を学年、分掌、教科を越えて議論できる場として機能してきた。	B	・生徒の内発性を引き出すために、AL型授業は継続しながら、基礎力の徹底した充実を図り、発展的な学習が進められる素地を固める授業を研究し実践する。 ・今後も保護者と連携した指導を継続し、保護者の理解を得ながら生徒の心身の成長を支える。 ・文武両道の精神を尊重し、生徒の人間的成長を目指した部活指導が出来るように放課後の指導のありかたを共通認識し、教科・顧問・担任間で協力できる体制をつくる。 ・土曜授業の公欠者対象の補習を検討する。 ・各種会議での検討内容、教科会、学年部会を充実させるために、必要に応じてメンバーを召集し、柔軟に問題の共有と検討、対策の検証ができるよう努める。 ・担任と学年部と協同した会が持てるシステムを検討する。
	「土曜日授業」「1授業単位65分」を活用しながら、「アクティブラーニング」の研究実践の進展・充実	・昨年度まで研究推進してきた「アクティブラーニング」の考えを発展させ、教職員研修の成果が日々の学習指導を通じて、生徒に還元されている。 ・生徒の学びがテストや大学受験といった実利的目的にとどまらず、真理探究や社会貢献といった高次な目標に向かうものとなっている。さらに、生涯にわたる学びの意義や教科の魅力を理解し、学習が内発的・主体的なものとなっている。	・「アクティブラーニング」の目的や効果を多くの教職員が理解し実践しているが、授業の中での効果的な実践方法については教職員の力量に頼るところが大きい。 ・学びの意義を理解し、主体的に学ぶことができる生徒も増えてきたが、まだ「やらされる学習」「与えられる学習」にとどまっている生徒も多い。 ・教職員の側にも「与えないと学習しない」という意識が依然として残っている。 ・アクティブラーニングを成立させるための、家庭学習や暗記事項と連動した授業づくりを研究中である。	・校内研修や研究授業等を通して「アクティブラーニング」に関する知識や技術を全ての教職員が習得するとともに、65分授業に合う東高独自の授業スタイルについて科内で検討し、モデルとなる方法を策定する。 【校内理論研修①…7月14日　講師　杉山二季氏（東京大学特任助教）】 【校内理論研修②…9月18日　講師　中村洋子氏（埼玉県教育局高等教育指導課）　示範授業　奚生川大先生（市立浦和高校）】 ・校外理論研修や校外教職員との交流を通じて、指導力・実践力の向上を図る。 【県主催研修…年間4回　国語・地歴公民・数学・理科・英語】 【校外教職員との交流…地歴公民・数学・理科】 ・より質の高い「アクティブラーニング」を通じて、主体的な学びの楽しさや価値をより多くの生徒に体感させることで、生徒の内発性・主体性を促進し、その後の学習活動につなげていくことができるような授業を実践する。 ・教科間でアクティブラーニングについて連絡会を開催し、本校のあるべきアクティブラーニングのかたちについて検討する。	・計画通り、「アクティブラーニング」理論研修を2回実施できた。9月に実施した数学の研究授業は奚生川先生(県外講師)から有効な意見をもらうことが出来た。 ・各教科で、前期、後期に1回ずつ研究授業を予定しているが、未実施の教科がある。 ・手法については定着しつつあるが、学業成績に反映されるところまでには至っていない。 ・家庭学習調査より、昨年と比較して1，3年では伸びているが、2年生では減少していた。1年では伸びたとはいえ、目標とする3時間には達していない。 ・生徒アンケートの結果から、自発的な取組に問題があることがわかった。 ・多教科参加の小委員会をつくり、「アクティブラーニング」を教科を越えて検討できる体制が出来た。	C	・転入教職員に本校の「アクティブラーニング」を理解してもらうためにも、第1回教職員研修は5月の早い時期に実施する。 ・授業は基本的に公開となっているので、積極的に授業を見せ合う体制を作る。 ・「アクティブラーニング」の目的や期待する効果について、研修担当から教科主任に再確認する。 ・1年生のオリテン合宿で「アクティブラーニング」の取組方を指導する機会を持つ。 ・生徒に「アクティブラーニング」の狙いと、アクティブラーニングの成功には自主的な取組の充実が不可欠であることを理解させるため、「アクティブラーニング」の概念図を作成し、教室に掲示する。 ・知識定着のために必要な取組を実施すると共に、「アクティブラーニング」の目的を達成するために倉東独自の取組を進める。	・授業評価アンケートの結果として、後期は全項目で前期よりも改善し、昨年度後期と比較してもほぼ全項目でAB評価が改善している。また、92%の生徒が「教え合い、意見交換、発表など、言語活動を通して課題を解決する場面が授業にある」と答えており、昨年度に引き続き高い数値で推移している。プロジェクターやパソコンなどのICT機器の効果的利用が進んでおり、アクティブラーニングの技法は、ペアワークからディスカッションに至るまで多様になっている。 ・「定期考査や模試から、学力がついてきていると感じている」生徒も、前期比で5%、昨年比で3%アップした。 ・各教科で研究授業が行われ、研究協議で改善の方策が話し合われた。 ・教職員研修や先進校視察を行い、その成果を全職員に報告し、周知した。 ・11月の後期中間考査直後に実施した家庭学習調査では、前回(夏休み直後)に比べて1年生が−19分、2年生が＋2分、3年生が＋78分であり、1・2年生の学習が停滞した。しかし、「授業の振り返りを通して自分の課題を明確にし、予復習を進んで行っている」生徒はが前年度比＋8%、「課題だけでなく、授業から発展した内容を自発的に学習している」生徒も前年比＋10%であった。 ・アクティブラーニングの概念図を作成し、内容を検討している。 ・ほとんどの教科・科目で授業中に生徒の言語活動を取り入れており、教科によっては、授業の節目で単元テストを行い生徒に刺激を与えている。 ・アクティブラーニング小委員会を開き、各教科の取り組みを共有し、本校の問題点や改善点を検討した。	B	・引き続き教職員を先進校視察等の研修に派遣し、先進的な知見を取り入れてアクティブラーニングを充実させる。 ・生徒に、「予習・復習しなければついて行けない授業」を行い、学習結果を確認・深化させる授業を行う。その上で、さらに高い段階の学習や活動を必要とする教材や設問・発問の工夫を行う。 ・生徒アンケートでは昨年度よりも各項目の数値が改善しているが、学習時間調査や外部模試の結果からは、生徒の学習が大いに高まったとまでは言えない。アクティブラーニングの手法はかなり浸透してきたと思われるが、さらなる充実を図るためには、生徒の活動の質・量双方の向上が必要である。そのために、知識・暗記の必要性を再認識し、各教科・科目でさらに家庭学習が必要となる授業および評価の方法を確立する。 ・「予復習を進んで行い」、「自発的な学習に取り組み」その結果「学力の向上が実感できる」生徒が増えるよう、アンケートの分析を行う。 ・アクティブラーニング小委員会を開き、各科の進捗状況の確認と成果の共有を図る。
2．進路指導の充実(キャリア形成)	OJTの充実と進路指導力の継承 ※OJTオン・ザ・ジョブトレーニング	・全教職員が「倉吉東高校のかたち」に基づいて、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の意識が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと向けられるような生き方指導を行っている。 ・全教職員が進路指導に関する適切な知識や技能を習得し、3年間のどの段階においても、適切な指導を行っている。	・「倉吉東高のかたち」における「21世紀をリードする人材の育成」とキャリア形成とのつながりが十分に理解されてはいない。社会貢献という観点を含めた進路設計ができない生徒が一部見られる。 ・3年生の進路検討会に加え、1・2年生の進路検討会の参加者も増え、教職員の意識は向上した。一方で、生徒の志望は多様化しており、教職員の指導がますます重要となっている。	・「倉吉東高校のかたち」の理念の生徒・保護者への浸透を本校の教育活動にあらゆる場面で心がけるとともに、生徒が自分と社会との関わりの中で進路選択に主体的に取り組めるよう指導する。 ・1・2年の進路学習の内容を改善し、大学調べや学部学科調べを、社会貢献という観点を含めて生徒が自らの進路を考える機会としてとらえ、指導の充実を図る。 ・各学年の進路検討会において積極的な発言を促すとともに、担任団と分掌の連携により充実させ、学力の分析充実に基づいて生徒一人ひとりが適切な進路志望がもてるよう工夫する。 ・研修等で得た情報の共有を一層進めるとともに、担任が的確な進路指導ができるよう学年間での連携を図る。	・育友会総会、学年保護者会、進路のしおり等を通じて、人材育成としての面を強調し、キャリア形成の重要性を説いてきた。進路のしおりでは、今年度も生徒とその保護者に執筆を依頼し、保護者の目線での原稿を掲載した。また、学年独自で入試に関する保護者会を実施し、保護者の意識高揚に努めた。 ・夏季休業を使い、1年生では大学調べ、2年生では学部・学科調べを実施し、各クラスで発表を行い、意識づけを行った。 ・新旧3年担任会への参加者28名、3年進路判定会への参加者32名であり、昨年度に比べ、参加者が減少した。内容の濃い会議であるので、参加者の増加を促したい。 ・研修会での内容については、回覧等により教職員との資料の共有ができている。また、学年団と連携し情報共有を行っている。3年進路判定会を通じて、進路指導に関する学年間の連携を図った。	B	・生徒に対しては、今後とも学年集会や講演会を通じて、21世紀のリーダーに必要な資質や学びについて、積極的に伝えていく。また、他の分掌とも連携し、保護者向けの講演会の内容の充実を図る。 ・1・2年については進路学習が本格的に始まる。1年生については、大学と受験科目調べ、2年生では社会貢献の観点からの学部学科研究へと深化させる。学習への動機付けとなる志望理由がもてるよう指導を充実させる。 ・3年判定会議（12月）・出願会議（1月）、1・2年進路検討会（1月）において、積極的に発言できるよう、資料を早めに配布するなどの工夫を行い、充実を図る。 ・教科学年分掌主任会の内容を充実させ、学年間での連携を一層図るとともに、必要があれば、学年主任が集う会を設ける。	・「倉吉東高のかたち」について、概要把握できている生徒・保護者の割合はともに7割、「共感する」の割合は生徒で増加し8割、保護者は9割を維持している。保護者には高大接続を見据えた講演会を2月に実施。 ・1年生では受験科目調べと連動したコース選択及び志望校調査、2年生では学部学科研究に加え、社会貢献の観点を取り入れた志望理由書の作成を行い、学びへの下支えを行っている。 ・3年進路判定会（12月）の参加者は38名、出願判定会議（1月）は35名と一定の参加者数があり、研修としても意味のある内容の濃い情報交換が行われた。また、1年の進路検討会には30名が参加。3年団からの適切な志望校をもつ意義が語られ、多くの教職員の参考になった。 ・学年主任が集う会は実施しなかったが、教科学年主任会で学年主任同士の積極的な意見交換があり、学年間の連携が図られた。	B	・「倉吉東高のかたち」について、保護者の理解と共感が進んでいるが、生徒の理解を一層進める必要がある。21世紀をリードする人材の育成＝キャリア形成であることを意識付けることができるよう、進路学習の内容の改善と他分掌との連携を一層進める。 ・2年生での志望理由書の作成は、今後の高大接続の方向性とも一致していることから、今後も継続し、そこにいたるまでの進路学習の内容について再検討するとともに、志望理由書が生徒の内面の向上につながる指導を行う。 ・3年進路判定会については、内容面では充実しつつあり、更に多くの教職員の参加を促す。1・2年生の進路検討会においても、資料配付を早めに行い、意見交換を活発なものとし、低学年からの指導のノウハウを継承する。 ・学年間の連携は進みつつある状況にあり、今後ともこの流れを継続するとともに、必要があれば学年主任が集う会を設ける。
	中堅・難関大学合格者数の向上	・中部地区を代表する進学校として、生徒・保護者・中学校などからの期待にふさわしい実績を維持し、さらなる向上が期待できる。 ・国公立大学現役合格者数125名以上。 ・中堅国公立大学以上現浪合格者数70名以上。 （現役合格者数50名以上） ・難関大学現浪合格者数20名以上。 （現役合格者数15名以上） ・東京大学現浪合格者数5名。 （現役合格者数3名以上）	【国公立大学現役合格者数】 H24年度140名　H25年度120名　H26年度131名 ※H25年度より5クラス 【中堅国公立大学以上現浪合格者数】 H24年度52名　H25年度49名　H26年度45名 【難関大学現浪合格者数】 H24年度21名　H25年度25名　H26年度18名 【東京大学現浪合格者数】 H24年度2名　H25年度1名　H26年度1名	・1年次から志望校指導を行い、3学年を通じて適切な進路目標を設定できるよう支援する。 ・学習習慣の確立を意識した初期指導を充実させるとともに、定期考査や模擬試験における学力分析を活かしながら、設定した志望が実現可能となるような学力の育成を目指す。 ・1・2年において、学習習慣の確立及び維持・向上に努め、学力中位層以上の拡充を図る。 ・授業及び3年放課後課外等の内容の充実させ、記述力の育成を図り、学力中位層以上が厚くなるように努める。 ・県外高校との交流や本校独自の講座を通じて目標達成のための意欲を高める。 ・3校合同対策講座や課外などによりチーム化を図り、互いに切磋琢磨できる環境づくりを行うとともに、指導の開始時期を例年よりも早め、超難関校への現役合格を目指す。	・各学年とも志望校調査を2回実施した。概ね適正な志望校であるが、学力の面で不十分な生徒に対する指導が課題となっている。 ・各学年とも学力中位層の薄さが課題となっている。学習時間の確保、学習の内容等で、生徒が学習に積極的に取り組めるような仕掛けや面談が必要な状況にある。 ・放課後質問に来る生徒が増えつつあり、学習に前向きな生徒が増えつつある。 ・9月から放課後課外を実施。内容面での充実（分野別対策や記述の育成）を例年以上に目指している。 ・2年生の県外高校との交流は11月に実施予定。1年生の講座については、現在検討中である。なお、大山学習合宿終了後に1・2年ともにOBと懇談会をもち、高めの志望校をもつ意義を感じる機会をもった。 ・3校合同対策講座への参加者は8名。昨年度より減少したが、意欲の高い生徒が集まり、積極的に取り組んでいる。	C	・学年進行で適切な進路目標がもてるよう、1・2年の進路検討会の時期を例年より早め、担任が面談を行える時間を確保する。 ・教科主任会で出ている情報が共有され、教科担当者が授業や指導に活かせる状況にする。 ・生徒の学びへの自覚が促せるよう、個別面談を充実させる。 ・前年度の反省を生かし、生徒の状況を的確に把握し、学力向上に努める。 ・CT後の特別課外の内容が充実するよう検討を進める。 ・2年生は11月の交流以外についても検討中。1年生については早期に提案し、志望校維持ができるように支援する。また、大学訪問（2年）や首都圏研修（1年）を通じて、生徒の意欲を高める ・今後、放課後課外とも連動させグループ化し、個別指導をさらに展開する予定。1・2年生については、他校との交流や独自の講座を通じて、意識づけを行う。	・国公立大学現役合格者数は目標を達成できる見込み。中堅大学以上の合格者は目標を下回る予想だが、難関大学への合格者数は昨年度を上回る見込み。（入試結果については後日記入） ・学年集会をタイムリーに行い、生徒に対する学びへの姿勢の活性化を行図った。教科主任会でも、学力分析とその対策が教科で話し合われ、その結果、1・2年生ともに、学力面での向上が見られた。3年生については、文系は順調な推移であったが、理系が苦戦した。 ・1・2年とも、志望校調査での内容検討と、進路検討会を早めに実施することにより、担任の個別面談が的確にできるよう配慮した。 ・3年冬季休業での補習内容を変更し、より実践的な内容とした。また、CT後の特別課外についても、講座間の連携や添削指導の充実を図った。 ・2年生は県外難関大学合宿に5名が参加、その後の県外セミナーにも18名が参加し、難関校受験に対して意欲が高まっている。1年生については、難関大学向けの学校独自の講習を3月に実施。 ・3年生は、今年も2次課外や3校合同東大対策講座により、生徒のチーム化が進んだ。特に、3校合同東大対策講座については、参加者は昨年度より少なかったが。アンケート結果はよく、他校との切磋琢磨の中で生徒は学力をしっかりつけていった。	B	・難関大学の合格者増につながったノウハウを継承し、中堅大学以上の国公立大学への合格者数を増やすために、1・2年での基礎的知識の定着を重視し、3年次における実戦力の育成につなげていく。 ・3年生理系が苦戦する傾向が続いていることから、授業に加えて長期休業中の補習についても、内容の改善を検討する ・適切な志望校をもつ意義について、1・2年生の理解を一層深めるとともに、その志望校が達成できる学力の育成と、志が維持できる面談指導の充実を図る。 ・今年度のセンター試験及び2次試験等を分析しながら、新課程になって導入された分野への対策を検討し、生徒へ還元する。 ・放課後課外や2次試験対策課外のグレード別での実施、並びに、センター後の講習間連携は、効果があることから来年度も実施する。 ・冬季休業中の3年生の演習については、生徒の状況を検討し、内容面での改善を図る。 ・1・2年生が難関校への志望を維持し学力の向上に役立っていることから、2年生県外難関大学合宿、県外セミナー、1年生独自講習を継続する。特に、1年生については、新たな学校独自の対策について検討する。 ・3校合同東京大学対策講座は、生徒は多くの刺激を受け、難関大学に向かう動機付けとなっており、来年度も実施する。他校との連携を深め、指導のノウハウの共有と講座内容の改善を一層すすめる。

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	後期へ向けての改善方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
３．積極的な活動の創成（活動創成）	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・全ての生徒が自己のリーダーシップを自覚し、より高きを目指す創造的な態度で生活している。 ・生徒自身が社会に広く関心を持ち、社会的課題に対して当事者意識を持っている。 ・自分や社会の将来に希望を持ち、今現在という時に充実感を感じながら、真剣に日々の生活を送っている。	・リーダーの資質を持っている生徒は少なくないが、それを自覚し発揮しようとする態度は不十分である。 ・社会的に逸脱した行動をとる場面はほとんど見られないが、その社会に疑いを持ち、よりよくしていこうとする態度が不十分である。 ・自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多くいる中で、理想と現実とのギャップに苦しみ、学校生活を消極的に過ごしている生徒もいる。 ・概ね計画性をもって自らを律しながら生活できているが、将来への不安や見通しの悪さから、今現在を充実させきれない生徒がいる。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事、日常的な委員会活動を通し、リーダーシップを発動せざるをえない場面を数多く設定する。また、生徒に適切に指導・助言を行うことで、それらの行事が本来目的としている領域に到達できるよう、創造性を十分に発揮させる。 ・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、また日常生活においても、交通安全指導や服装指導を通し、自己と社会との密接な関わりを意識させる。その際、学年団や他分掌との連携を密にする。 ・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通じさまざまな失敗を経験させ、現実を堂々と受け止められる強さをはぐくむ。また、教育相談を充実させるとともに、生活に消極的になった生徒に自分が出来ることを少しずつ達成させる成功体験を積ませることによって、自信を取り戻させる。 ・学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自身の手で計画、準備、運営させることにより、今現在の充実が未来を切り拓く力につながっていくことを経験させる。また、そこで経験したことや学んだことを言語化する活動を通し、それからの日常生活に生かしていけるようなカとする。	・前期生徒会執行部（会長１、副会長２）は、多くの学校行事を通して、生徒への周知や運営に難しさを感じる一方で、生徒会活動の楽しさ、達成感を味わうことができた。 ・交通事故発生件数については前年同期より減少したが、特に自転車通学や自動車による送迎等の通学マナーに関して依然として問題がある。 ・素行等による生徒への指導はほとんど見られない。 ・夏季休業終了までに1年生でボランティアに参加した生徒は75名であった。 ・1年生には、入学当初の大山オリエンテーション合宿でスクールカウンセラーによるコミュニケーション演習を実施した。新入生の不登校生徒は0名。 ・不登校傾向にある生徒にも学校行事おいて様々な役割を与えることで、達成感や充実感を感じられるようにした。 ・気になる生徒については、担任、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、教育相談担当教職員がすぐにケース会議を開催できる体制を構築しつつある。 ・学園祭や高校生フォーラムは、準備期間が例年より短い中、各セクション、パートのリーダーを中心に主体的に企画立案から運営までを行った。また、各反省会では、上級生から下級生に対して、継続すべき点や問題点等の引継を行った。	B	・後期執行部については、次年度の学園祭実行員や高校生フォーラム実行委員を務める生徒が多いため、校内の様々な活動を通してリーダーシップを育成していく。 ・通学マナーの向上について、生徒に対して継続して意識の向上を働きかけていく。 ・次年度に向けて、薬物乱用防止教室及び交通安全教室を特に1年生が早い段階で受講できるよう開催時期を見直す。 ・12月のボランティア発表会に向けて、1年生全員が参加するよう、声かけを行っていく。 ・気になる生徒に関するケース会議が必要に応じて迅速に開催できる体制を維持し、早期に各方面から対応していく。 ・今年度開催した学園祭やフォーラムの問題点等について、次年度の生徒実行委員会に引き継ぐとともに、今年度の後期から次年度の学校行事の運営に向けて問題意識を持って学校生活を送るよう指導していく。	・後期生徒会役員選挙では、会長に2名、副会長に3名の立候補があった。発足した生徒会執行部は1年生も参加しており、活発に意見を交わしながら生徒会誌の発行に向けた活動を行っている。また、生徒会長の発案で、生徒の意見を生徒会活動に反映させるため、生徒会室前にストーブ（STOB：So-To Opinion Box）を設置した。 ・後期は交通事故の報告は0件であったが、交通マナーや公共施設でのマナーなど、校外における生徒の態度に依然として問題が見られる。学園祭等における校外での活動でも、周囲への配慮のできる生徒の育成という面で改善がもとめられる。 ・12月初旬には、1年生のボランティア活動が100%の達成率であった。ボランティア活動発表会の後に今年度から6講座の講演会を実施し、地域との関わりについて当事者意識を高めることができた。 ・雨天時等に保護者による学校への送迎と学校周辺への車での進入が相変わらず多い。 ・学園祭やフォーラムではいろいろな失敗や葛藤を通して、生徒たちの成長した姿が見られた。また、日々の委員会活動や生徒会行事から、役割意識を持ち、学校全体の問題に目を向け改善していこうとする姿勢も見られた。部活動では限られた時間の中で充実した活動を行っており、部室の使用状況も改善した。教育相談については、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの助言を得ながら、関係教職員で支援内容を決定実行している。 ・次年度の学園祭に向けて、学園祭実行委員会を立ち上げた。多くの1年生が各セクションのサブリーダーとして意欲的に参加している。	B	・様々な活動が生徒による主体的かつ創造的なものとなり、その活動を通して、リーダーとしての自覚を促し、さらなる成長につながるよう、適宜、的確に助言を行う。 ・生徒会執行部や学園祭実行委員会が主体となって、引き続き啓発活動を行う。また、教職員側からも学年団や他分掌と連携をとりながら、問題の発展的解消を目指す。 ・ボランティア活動については、事前指導からボランティア活動の意義を理解し、社会とのつながりを更に意識させたい。 ・折に触れて保護者に対する啓発を行っていく。 ・学園祭の学校行事等を通して、消極的、受動的態度を積極的、能動的態度に変容するよう成功体験を積ませる取組を行っていく。部活動では、継続して部室等の管理、活動時間の徹底について指導していく。教育相談については、今後も気になる生徒に関するケース会議を必要に応じて迅速に開催できる体制を維持し、早期に各方面から対応していく。 ・今年度の学園祭やフォーラム等の活動について、次年度に活かせるようしっかりと検証・反省する。その上で、年度内に次年度の活動の構想をまとめ、計画立案できるよう指導・助言していく。
４．広報連携力の発展と国際理解教育の充実（連携発信）	中高連携の発展	・中高の連携が進み、効果的・一貫的な英語の指導ができている。	・中学校とのスクラム教育を行い、中高教職員の交流と相互の授業研究が進んではいるが、まだ十分であるとはいえない。 ・中学生英語ブラッシュアップ講座を実施しているが、参加者の満足度が高いにもかかわらず、希望人数が伸び悩んでいる。	・今年度も東中・河北中と英語教育で連携し、本校教職員による中学への乗り入れ授業を実施する。 ・長文読解を中心として、家庭学習の充実、読む量・スピードを上げる手法について継続的に研究協議会を持ち、授業改善を図る。 ・相互の授業参観の機会を増やし、相互理解を深め、授業力アップに繋げる。 ・体験入学の際だけでなく、中学校訪問説明会など機会を捉えてPRしていく。 ・中学生にとって魅力的な講座となるように内容を充実させ、中学校の学校行事等に配慮し、中学生が参加しやすい環境づくりを行う。	・乗り入れ授業は東中2回、河北中3回実施（9月末現在）。相互の授業参観は、東中及び本校が7月に実施した公開授業にそれぞれ複数の教職員が参加し、実態把握に努めている。 ・中高担当者の研究協議を毎週木曜日の午後に設定し、継続的に研究テーマについて話し合いの場を持っている。 ・機会を捉えてPRをし、今年度の参加者は88名となった（昨年度79名）。中学生の実態に合わせて時間設定をしたり、授業の進め方を議論するなど、昨年度の反省を生かした取組をめざしている。	B	・年間計画に従って乗り入れ授業及び授業参観を実施し、中高連携をより効果的なものにする。 ・参加した中学生の様子を基に、内容の充実についての検討を行う。	・乗り入れ授業は当初の計画通り、東中6回、河北中8回実施。授業後のアンケートからは肯定的評価が得られている。授業参観については昨年と比較すると相互参観者数は増加した。また、担当者協議についても定期的に開催できた。 ・登録者総数は88名であったが、5回実施した授業の平均出席率は約60%だった。授業の形態を改善するなどした結果、参加者の満足度は向上した。	B	・相互の授業参観に各校教職員が全員参加できるようにするため、研究授業および公開授業の日程を早期に確定し連絡しあう。また、その回数を増やすよう努力する。 ・中学校側の土曜授業実施日や行事を綿密に調査し、中学生がより参加しやすい日程調整を行う。
	交流活動の推進	・さまざまな国際交流の機会を通じて自国の理解を深めるとと共に、他国の文化や価値観を理解・尊重し主体的な交流が促進されている。	・国際高校生フォーラムや交流事業を行っているが、積極的にホームステイに参加したり、ホストファミリーになりたいという希望が少ない。 ・交流が参加した一部の生徒のみに留まっており、全校的な広がりになっていない。	・育友会総会の前の「大人（おせ）の一言」で国際交流をされている方や、ホームステイを受けていただいた保護者の方にお話いただき、異文化と触れる意義や楽しさについての生徒の意識を高める。 ・韓国研修のホームステイの交流を共有する学習の場を設けたり、国際高校生フォーラムでの交流を、多くの生徒が参加できるような内容にするよう工夫する。	「大人（おせ）の一言」の際は、外国滞在経験がある保護者や、ホームステイ受け入れ経験のある保護者からお話しをしていただき、またソ・ヒョンソプ先生を招いての講演会を行うなど、生徒が国際交流の意義を理解する機会を多く持つことができた。また韓国研修事前研修会を通じてホームステイのPRをした結果、過去最多のホームステイ希望者を募ることができた。 フォーラムの際の交流は、例年並みのものに留まったが、6月のロシアとの囲碁交流の際は、囲碁部だけでなく新聞部の生徒も歓迎の飾り付けを行うなど、担当部署以外の生徒も巻き込んだ交流を行うことができた。	B	・来年度の安養高校の生徒の受け入れの際は、保護者及び生徒対象の説明会を行い、ホームステイに対する興味関心を高めて「やってみたい」と思っていただくことが必要である。 ・11月に開催される近畿高総文祭に参加する江原道の生徒のホームステイをはじめとする県の取組を活用し、国際交流に参加する機会を広げる。	・前期以降、特に生徒・保護者に対するPRはしていないが、韓国研修の際の安養高校での熱烈な歓待や、江原道の高校生との交流及びホームステイを通じて、生徒の韓国への親しみと興味関心が高まった。 ・2年生は韓国研修旅行で韓国の文化・歴史を肌で感じ、江原道の生徒の訪問の際は、多くの生徒が舞踊団の迫力ある舞台に感銘を受け、韓国への興味関心が高まった。	A	・現在のよい流れを発展させ、来年度の安養高校の生徒の受け入れの際には時期を見て説明会を行い、自発的な希望者を増やしていくことが必要である。 ・国際交流の機会を適切に捉えて、多くの生徒に交流を促がすとともに、東高HPや広報誌で紹介することで生徒や保護者と情報を共有し、交流の輪を広げていきたい。
５．定時制教育の充実（定時制）	授業規律の確立と授業改善による学力向上と希望進路の実現	・規律ある学習態度で授業に臨むとともに、学習の意義や目的を多くの生徒が理解し、その結果、一人ひとりの希望進路の実現につながっている。 ・分かりやすい授業と生徒の実態に合ったきめ細かな指導を行うことで、生徒の学習意欲や学力が向上している。	・多くの生徒が落ち着いた態度で授業に取り組むことができるようになってきている。 ・学校紹介による正規雇用を目指す生徒が増えるとともに、4年制大学や短大など上級学校へ進学する生徒も出てきたが、具体的な進路目標を見出せない生徒もいる。 ・基礎的な学力と学習習慣が身についていないため、理解に時間がかかったり、途中で諦めてしまう生徒が多い。	・授業規律の徹底に努め、生徒が落ち着いて学習に取り組める環境の向上を推進する。 ・担任だけでなく、進路指当やキャリアアドバイザーとも連携しながら、一人ひとりに適した進路目標を早期に見つけることができるよう指導を行う。 ・授業改善に努めるとともに、個別指導や面談を通して生徒が学習意欲を維持・向上できるよう指導する。	・多くの生徒が規律ある態度で授業に臨んでいるが、一部に安易な遅刻や居眠りなどが見られる。 ・多くの生徒が進学・就職希望いずれも学校の指導を受けながら、それぞれの進路目標の決定と実現に向けて努力している。 ・多くの授業で、ICT機器を使って生徒の意欲や関心を引きつけたり、理解を深めるなど授業の改善に努めている。	B	・遅刻や居眠りに対しては毅然とした態度で指導を継続し、引き続き学習環境の維持向上に努める。 ・全教職員で協力しながら進路指導を継続するとともに、進路未決定者については安易な方向に流れることのないよう面談等を通して丁寧な指導を行う。 ・一部に苦手・嫌いな科目で消極的な態度が見られる生徒がいるが、その科目の必要性や楽しさを理解させるための指導を継続する。	・各学年とも授業規律が守られ、多くの生徒が年間を通して落ち着いた態度で授業を受けることができた。 ・3年生の進路決定状況 進学希望…6名中5名決定（短大1名、専門4名） 就職希望…8名中8名決定（学校推薦6名） その他…1名 ・各教科で生徒の実態に合わせて授業改善に努め学習意欲を喚起することにより、学習成績が向上した。	A	・授業規律については、教職員間で再度共通理解し、年度初めだけでなく全校集会等で生徒へ繰り返し周知するとともに、問題のある生徒には全教科・全職員で指導を行う。 ・進路学習を充実させ、3年次生に関しては具体的な対策を早期に開始し、1・2年次生に関しては適正な進路目標を設定できるように指導を充実させる。 ・生徒のこれまでの学習歴や特性を理解した上で、一斉・個別など様々な指導法やICT機器を用いて、効果的な授業を行う。
	生徒の主体性の育成	・生徒が主体となって様々な活動や行事を行うことによって、企画・運営など社会で必要とされる力を身につけることができる。	・昨年度から生徒会が主体となって行事を行い、少しずつ企画や運営に携わる生徒が増えてきている。	・生徒会を主体としながら、より多くの生徒が企画や運営に携わることで、連帯感や達成感をもてるような仕掛けを工夫する。	・七夕祭りや生徒総会・壮行会などの行事では生徒が中心となって企画・運営を行い、達成感を味わうと同時に裏方的な役割の重要性を認識できた。		・クリスマス会・かるた大会・球技大会では生徒に任せる機会をさらに増やし、運営する側だけでなく参加する生徒にも有益な行事になるよう工夫したい。	・行事を運営した生徒に成長が見られただけでなく、その様子を見て、他の生徒も協力したり、積極的に関わろうとする姿が見られた。		・行事だけでなく、交通マナーや挨拶など生活面でも生徒会が主体的な呼びかけができるよう指導する。
	積極的な生徒指導	・あらゆる機会を捉えて積極的に生徒との関わりを持ち、生徒の実態を的確に理解し、効果的な指導を行うことができる。 ・家庭や職場と連携し、校外での生徒の様子を把握しながら、協力して生徒を支援することができる。	・情報交換会を毎日もち、面接や日々の会話を通じて得た生徒に関する情報を全教職員で共有し、指導に生かしている。 ・家庭訪問や職場訪問を行い生徒の様子を理解しようと努めている。	・情報交換会を継続し、生徒に関する情報の共有に努めるとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも連携してよりきめ細かな指導を行う。 ・学校から家庭への連絡や情報発信を継続するとともに、保護者会などを通して信頼関係を構築し、家庭から学校へ連絡や相談をしやすい体制を維持する。	・毎日の情報交換会は非常に充実しており、学校運営・生徒理解上有効に機能している。 ・7月保護者会で学校の教育方針や教育活動に対して概ね理解していただいていることが分かった。		・今後も情報交換会を継続し、情報共有・意見交換の場として内容をさらに充実させていく。 ・今後も粘り強く働きかけを続けていき、生徒の成長には家庭のサポートが不可欠であることを伝えていく。	・毎日の情報交換会を通して生徒に関する情報を共有し、早期に対策をとることができた。 ・保護者会や職場訪問を通して、生徒に関する情報を共有し、家庭や職場との協力体制を築くことができた。		・情報交換会を継続するとともに、アンテナを高くして生徒の学校内外での様子の把握に努め、指導に活かす。 ・新入生の保護者とも良好な協力体制を築くとともに、在校生の保護者へも積極的な働きかけを継続する。

○ 評価基準

A　本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。

B　課題はあるが、改善に向けた取組が効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60%～80%の範囲内になっている。

C　課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40%～60%の範囲内になっている。

D　改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40%未満である。